

論文の要旨

ふりがな 氏名	こうはく 黄博 (印)
論文題目	中国におけるサブカルチャー：四坑文化研究
<p>論文の要旨</p> <p>本論文は、「中国社会における新たなサブカルチャー「四坑文化」について検討し、ファンダム研究の視点から論じたものである。</p> <p>現代中国において「四坑文化」と呼ばれる文化実践は、漢服、「ロリータ」、JK (Joshi-Kousei)、「コスプレ」という四つの仮装ジャンルを包括するサブカルチャーである。コスプレとは、日本で意味するところと同様に、着用者が愛好するアニメや漫画あるいはゲームのキャラクターに扮するパフォーマンスである。JKとロリータはそれぞれ、日本の女子高校生の制服に着想を得た服を着ること、ヨーロッパの古典的なファッションスタイルに影響を受けたドレスや小物を着用することが中心的な実践であり、中国においても近年、特に若者の間でその愛好者が増加しつつある。漢服は、漢民族が統治していた王朝時代の服を着ることを中心的な実践とし、今や多くの若者が愛好する仮装実践である。四坑文化に参画する人々は多様な実践を交差、融合することを通して様々なシンボル、意味、コンテンツを作り出しており、現代中国社会における若者の活力と創造力の一端を示していると言える。これまで、中国社会におけるサブカルチャーにまつわる研究、あるいはサブカルチャー自体を主題にした研究は多数行われきた。四坑文化に関してもいくつかの優れた研究がなされてきた。しかし四坑文化に関するこれまでの研究では、コスプレ、JK、ロリータ、漢服の着用実践を、それぞれ別個に独立したサブカルチャーとして扱う傾向があり、四つの活動の間の関連性、ファンたちの交流について深く検討してこなかった。本論文では、四坑文化の歴史と展開に対する考察により、ジャンルの異なるコミュニティ（漢服、ロリータ、JK、コスプレ）の実践が交差し、融合する状況の下で形成された、仮装をめぐる複雑かつ独特なファンダム文化であると定義し、四坑文化を包括的に扱うこととする。研究方法としては、個別のジャンルにおいてだけでなく、四坑ファンという広いファンダムを研究対象とし、参与観察、インタビュー調査および文献調査を組み合わせる調査を行う。そのうえで、ファンダム研究やコスプレ研究の視点および分析概念を援用しつつ、さらに新たな概念を導入しながら、包括的な分析を加え、四坑文化の現状を明らかにすることを試みる。そうすることで、現代中国社会で若者達に浸透しつつあるサブカルチャーの複雑な現状とその特徴をより深いレベルで解明し、中国内外のサブカルチャー研究に理論的実証的に貢献することを試みる。</p> <p>序論では、四坑文化の現状を紹介し、四坑文化の定義を検討した。そして、先行研究の検討を行い、その限界を明らかにしながら、本論文の枠組みを示した。先行研究の検討においては、まず、トランスメディア状況下での、オフライン活動を含むファンたちの実践が持つ創造性への着目というファンダム研究の研究視座が、四坑文化を検討する本稿においても有効性を持つと論じた。その一方で、これまで中国内外で、四坑文化、あるいは四坑文化の各ジャンルについての研究は多数行われきたが、議論の余地が多々残されていることも指摘した。特に、これまでの研究が四坑文化を構成するそれぞれのジャンルの仮装実践を、別個に扱い論じる傾向があったこと、それによって、ファンたちのジャンルの境界を越えた交流や実践の融合を捉えることができなかったこと、また、ファンたちのメディア領域での活動やアイデンティティ形成など、ファンたちの実践の一面だけを集中的に取り上げ、多面的な描写とその考察が不十分であったことを指摘した。それに対して、本研究では、ファンたちの、オフラインでのものを含む多様な、しかも越境性および多方向性を持つ実践を対象化して、様々な理論ツールを援用して分析することで、四坑文化の多面的な理解を目指すという研究方針を採用した。そしてそのことが、ファンダム研究やサブカルチ</p>	

ャー研究への理論的実証的貢献につながると論じた。序論の最後には、本研究の調査概要と四坑文化というフィールドについて、記述して紹介した。

第2章では、四坑文化の実践過程に対する調査結果にもとづき、その実践の特徴について分析して検討し、四坑文化が多様性を内包する参加型文化であることを論じた。まず、四坑文化は、トランスメディア状況が一般化したなかで、DIY 実践を主な実践形式とする参加型文化であることを明らかにした。第二に、四坑文化コミュニティは実践コミュニティとして捉えられることを示した。ただし四坑ファンの実践は、コミュニティの維持と発展に寄与しながら、彼らの実践によって異なるタイプのコミュニティの融合をも促進していた。第三に、「クロスコミュニティ・コーディネート」という概念を提起し、四坑ファンが絶えずに新たな実践形式を模索することが、四坑文化そのものの拡張に対しても多様な可能性を開いていること、その結果、四坑文化が多様性を内包する参加型文化となっていることを示した。その多様性を内包する参加型文化は、異なるジャンルのコミュニティのファンによる実践が交差し融合し、そして拡張するという、様々な展開可能性に開かれた実践コミュニティという特徴を持ち、そのことは、現代中国のサブカルチャーの発展の一形態を示していると論じた。

第3章では、主に四坑ファンのアイデンティティ構築に焦点を当て、主に二つの問題に注目した。一つ目は、四坑ファンたちがいかに実践を通してアイデンティティ構築するのかというものであり、二つ目は、四坑実践の時に現れるアイデンティティフェイクの多様性の背景には何があるかという問題である。この二つは独立した問題設定である一方で、相互に深く関連している。この二つの問いに取り組むことで、四坑ファンの実践とアイデンティティ構築との間の、複雑かつダイナミックな関係性を説明することができ、四坑文化の多面的な理解に迫ることができると考えた。

一つ目の問いに取り組むため、Wenger の「軌道」の概念を用いて、四坑ファンのアイデンティティが多様な軌道でどのように構築されるかを記述することを通して、ファンたちの多方向的なアイデンティティ構築の過程を分析した。次に、二つの目の問いについて、Wenger の理論では見逃されがちな、個人の能動性や創発性に焦点を当てるため、バトラーのパフォーマティビティ論を踏まえて、ファンたちのアイデンティティ構築についての記述と分析をおこなった。アイデンティティはパフォーマンスによって形成されるが、同時にその不安定性も指摘される。四坑ファンは、彼らの実践とパフォーマンスを通じて、独自のアイデンティティを構築するが、そうした自己呈示は、周囲からの認識と承認も必要とされる。ただし、四坑文化が内包する多様性、また拡張し続けるという特性は、四坑ファンとしてのアイデンティティ呈示への固定的な判断基準の形成を困難なものとしていた。四坑ファンのアイデンティティ構築に対して多様な認識が共存するというそのような状況は、現代中国社会に生きるファンたちのアイデンティティ構築のあり方に広い可能性をもたらしていると論じた。ファンたちにとって、四坑実践が、幻想を通して、自らのアイデンティティを模索する有効な回路となっているのは、そのような状況においてであった。

第4章では、都市空間における四坑文化ファンたちの実践に焦点を当てた。ド・セルトーの日常生活に関する議論、および Crawford と Hancock のヨーロッパのコスプレイヤーを対象とした研究を取り上げ、四坑ファンによる都市空間の流用を詳細に記述したうえで、彼らの実践が社会的抵抗行為としての側面を持つ点について考察を展開した。ヨーロッパのコスプレイヤーとの比較からは、四坑ファンたちの都市における実践は、ド・セルトーの言う「提喻」と「連結詞省略」の方法で都市空間を流用していること、またメインカルチャーや既存の秩序の転覆の意志を明確に持たないという点で類似性を持つものの、都市の特定の空間を持続的に流用し、より多くの実践空間を得ようとする点で、より積極的、かつ野心的であると考察された。そして、自らの実践を行うとともに、一般の都市住民とその場を共用し続けていくことを通して、都市空間の意味の改変に結び付けていこうとするこうした野心的な社会的抵抗の形態は、四坑文化が都市生活に、たとえささやかな形であっても侵蝕していくという、現代中国のサブカルチャーの独特の発展像を示していると論じた。

第5章で結論を述べた。本研究全体を通して行った、多様性と開放性を伴った参加型文化としての四坑文化についての議論は、現代のトランスメディア状況下における、他のファン・コミュニティの研究にも応用可能性を有していると思われる。本研究の考察は四坑文化だけに限定されているが、異なるジャンルのコミュニティ間のファンの実践が交差し融合していく状況は他のサブカルチャーにもあるかもしれない。本研究の四坑文化の考察は、現代中国社会のサブカルチャーに対する理解を深化させるとともに、他の国やジャンルのサブカルチャー・コミュニティの不可視化されてきた側面に光を当てることにもつながりうるだろう。本論文全体を通じた、四坑文化という奇妙なサブカルチャーの特徴の記述と分析は、四坑

文化、あるいは現代中国のサブカルチャーが持つエネルギーとダイナミズム、そしてそこに参加する若者たちの社会生活における意義と可能性を明らかにするとともに、サブカルチャー研究へのいくつかの示唆を含むものともなったと言える。

備考 要旨は、日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。